

補語（語幹）が差異化された接辞：可能形態と時制の無標形態

佐賀大学 留学生センター

第71回 人工頭脳工学研究会

古賀弘毅

2009年12月24日

概要：本日は、参加者の方といっしょに、標準語の可能形態 / $(rar)e$ / と対比して、佐賀西部方言の可能形態 / $\{(y)u, e\}$ / を分析し、そして、なぜ、佐賀西部方言の可能形態の文では、標準語のそれと異なる現象が起こるかを説明します。分析の要点は、可能形態がその補語として、基底形と現在分詞形のどちらの形をとるかです。さらに、佐賀西部方言において、どうして、可能

形態の補語が標準語のそれと同じ動詞形を取らないかについて説明を与えます。言語使用において混乱をきたす「同音異義の可能性のある接辞」を避ける言語のふるまいが明らかにされます。

キーワード： 差異化された接辞、可能形態の統語論、動詞の基底形、動詞の現在分詞形

## 1 標準語と佐賀方言の可能形文の違い

### 標準語の他動詞文

(1) 人々が ブギス語を 話す。

### 対応する受け身形文

(2) 人々に ブギス語が 話される。

### 対応する可能形文

(3) a. 人々が ブギス語を 話せる。

b. 人々に ブギス語が 話せる。

質問 1 ) 標準語の ( 1 ) ~ ( 3 a ) ( 3 b ) に対応する佐賀西部方言の文は、どんな文ですか。それぞれに対応する文を考え、書きましょう。標準語と佐賀西部方言との間に違いがありますか。あれば、どんな違いがあるか言いましょう。

### 対応する佐賀西部方言の他動詞文

(4) 人々の ブギス語ば 話す。 [佐賀西部方言]

### 対応する受け身形文

(5) 人々に ブギス語の 話さるっ。 [佐賀西部方言]

### 対応する可能形文

(6) a. 人々の ブギス語ば 話しゆっ。 [佐賀西部方言]

b. \*人々に ブギス語の 話しゆっ。 [佐賀西部方言]

佐賀西部方言の可能形文と標準語の可能形の文の違い:(3b)と(6b)。

## 2 分析

### 2.1 母音/e/終末語幹動詞に関する 1 ) 標準語の佐賀方言対応形と 2 ) 佐賀方言の標準語対応形

質問 2 ) 以下にいくつかの動詞の標準語と佐賀西部方言の非過去形、否定形、過去形が与えられていますが、どのようなおおきな違いがありますか。どこがどう違うか書いてみましょう。

- (7) a. 帰る [kaer-u] 帰らない [kaer-anai] 帰った [kaet-ta]  
 帰ー [kae:] 帰らん [kaer-aN] 帰った [kaet-ta] [佐賀西部方言]
- b. 見る [mi-ru] 見ない [mi-nai] 見た [mi-ta]  
 見ー [mi-:] 見ん/見らん [min/mi-raN] 見た [mi-ta] [佐賀西部方言]
- c. ほめる [home-ru] ほめない [home-nai] ほめた [home-ta]  
 ほむっ [hom-u-?] ほめん [home-N] ほめた [home-ta] [佐賀西部方言]
- d. 変える [kae-ru] 変えない [kae-nai] 変えた [kae-ta]  
 変ゆっ [kay-u-?] 変えん [kae-N] 変えた [kae-ta] [佐賀西部方言]

子音終末語幹動詞（例、(7a)）や母音/i/終末語幹動詞（例、(7b)）の非過去形に対して、また、その過去形に対して、佐賀西部方言の母音/e/終末語幹動詞（例、(7c)、(7d)）の「非過去形」は、標準語と大きく異なる。（その他、母音/i/終末語幹動詞（7b）の否定形が、標準語と大きく異なる。）

(8)  $X_i e\text{-ru} \leftrightarrow X_i\text{-u-?}$

(9)  $X_i e\text{-ta} \leftrightarrow X_i\text{-ta}$

受け身形の場合：

(10)  $\text{hanas-are-ru}$  [標準語]  $\leftrightarrow$   $\text{hanas-ar-u?}$  [佐賀西部方言]

標準語「得」の古典活用形「非過去形で名詞前の形：うる、過去形：えた」が、佐賀西部方言の母音/e/終末語幹動詞に使われていると考えることもできる。

## 2.2 可能形態に関する標準語の佐賀方言対応形と佐賀方言の標準語対応形

質問3) 前の節の結果から、標準語に、たとえば、母音/e/終末語幹動詞「話せる」があるのですから、佐賀西部方言にその対応する動詞としてどんな動詞があるはずですか。また、佐賀西部方言に、たとえば、「母音/e/終末」語幹動詞「話しゅっ(非過去形); 話しえた(過去形)」があるのですから、標準語にその対応する動詞としてどんな動詞があるはずですか。

可能形：標準語 → 佐賀西部方言

(11) hanas-e-ru [標準語] → \*hanas-u? [佐賀西部方言]

可能形態：佐賀西部方言 → 標準語

(12) hanasiy-u? [佐賀西部方言] → \*hanasiye-ru [標準語]

質問4) 前の質問の標準語対応形 /hanasiye-ru/ は、その否定形や過去形(13)から、「話しゅっ」は、もともとどのような形と考えられますか。

(13) 話しゅっ [hanashi-yu-?] 話しえん [hanashi-e-N] 話しえた [hanashi-e-ta] [佐賀西部方言]

(14) **hanasi-e-ru** [Underlying Form] → **hanasi-u-?** → **hanasi-(y)u?** [佐賀西部方言]

質問5) 標準語の可能形態 {/(rar)e/} と佐賀西部方言の可能形態 {/(y)u/, /e/} では、それらの取る補語の動詞の形については、どんな違いがありますか。

標準語では、可能形態 {/(rar)e/} は、現在分詞形 (例、/hanasi/) を取らず、動詞の基底形 (例、/hanas/) を取るが、一方、佐賀西部方言では、可能形態 {/(y)u/, /e/} は、動詞の基底形 (例、/hanas/) を取らず、現在分詞形 (例、/hanasi/) を取る。

動詞の基底形と動詞の現在分詞形は代替可能ではない。

- (15) a. 人々が ブギス語を {話し \*話s} 文化を 大事に する。  
 b. 人々の ブギス語ば {話し \*話s} 文化ば 大事に する。[佐賀西部方言]  
 c. 人々に ブギス語が {話される \*話しられる}  
 d. 人々に ブギス語の {話さるっ \*話しらるっ} [佐賀西部方言]

## 2.3 佐賀方言の可能形態 {/(y)u/, /e/} の補語と標準語の可能形態/e/の補語

### 2.3.1 標準語の可能形態/e/の補語：{他動詞[基底], 動詞句[基底]}

質問6) 話の最初に見た標準語の可能形態 {/(rar)e/} の文(ふたつ)(下に繰り返しして与えられているもの)では、それぞれについて、その文が真であれば、可能形態が補語として取る動詞、「話s」の主語や目的語は、どの格(「が」、「を」、「に」など)によってマークされていますか。

- (16) a. (= 3a) 人々が ブギス語を 話せる。  
 b. 人々に ブギス語が 話せる。

質問7) 質問6)の結果から、どの名詞がどの動詞の主語や目的語であるかの議論から、それぞれの文型の統語構造はどのようなものであると考えられますか。

補語が他動詞句の基底形の場合：

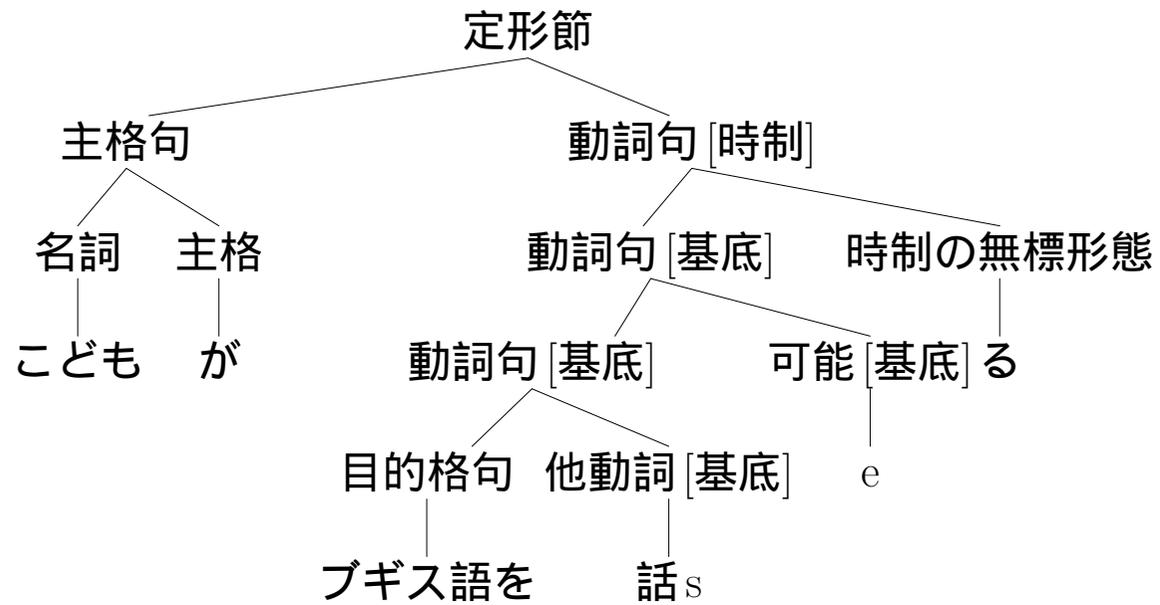


図 1: ‘こどもが ブギス語を 話せる’ の分析

補語が他動詞の基底形の場合：

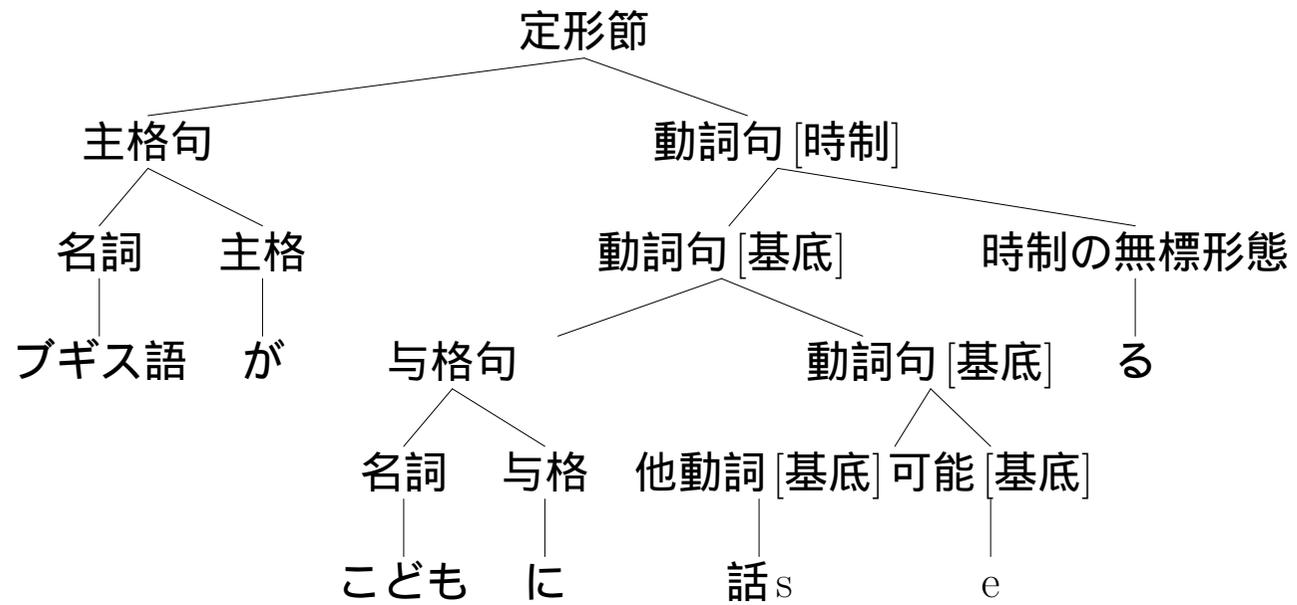


図 2: ‘ブギス語が こどもに 話せる’ の分析

2.3.2 佐賀方言の可能形態 {/(y)u/, /e/} の補語：{\*他動詞 [現在分詞], 動詞句 [現在分詞]}

質問 8 ) 話の最初に見た佐賀西部方言の可能形態 {/(y)u/, /e/} の文 (ふたつ) (下に繰り返しして与えられているもの) では、それぞれについて、その文が真であれば、可能形態が補語として取る動詞、「話 s」の主語や目的語は、どの格 (「の」、「ば」、「に」など) によってマークされていますか。

- (17) a. 人々の ブギス語ば 話しゅっ。 [佐賀西部方言]  
 b. \*人々に ブギス語の 話しゅっ。 [佐賀西部方言]

質問 9 ) 質問 8 ) の結果から、どの名詞がどの動詞の主語や目的語であるかの議論から、それぞれの文型の統語構造はどのようなものであると考えられますか。

補語が他動詞句の基底形の場合：

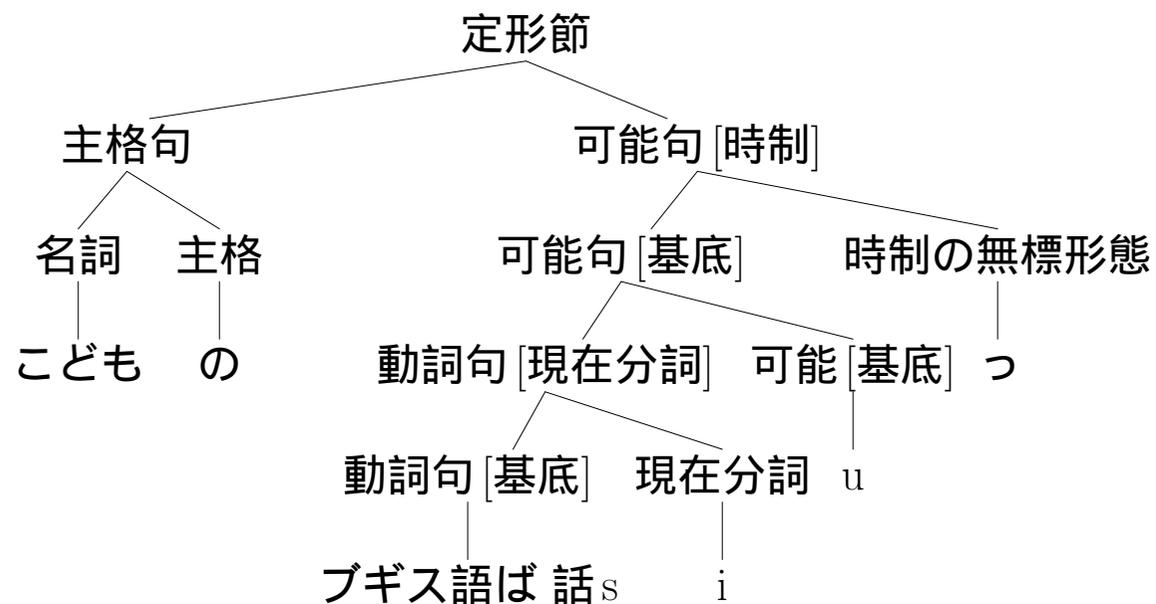


図 3: ‘こどもの ブギス語ば 話しゅっ’ の分析

補語が他動詞の基底形の場合はない。

質問 10) もし佐賀西部方言において、標準語の可能形態 / $(rar)e$ / の佐賀西部方言の対応形 {/ $(rar)u$ , / $(rar)e$ /} があったら、たとえば、佐賀西部方言では、どんな文が文法的に正しかったでしょうか。対応形 (11) と、標準語の文の統語分析の図 1 と図 2 を参考にして考えましょう。

補語が動詞や動詞句の基底形であるので、「こどものブギス語ば話すっ」や「こどもにブギス語の話すっ」も文法的に正しかったであろう。また、それらの統語構造は、図1と図2に対応するものとして分析されたであろう。しかし、実際にはこれはあり得ない。

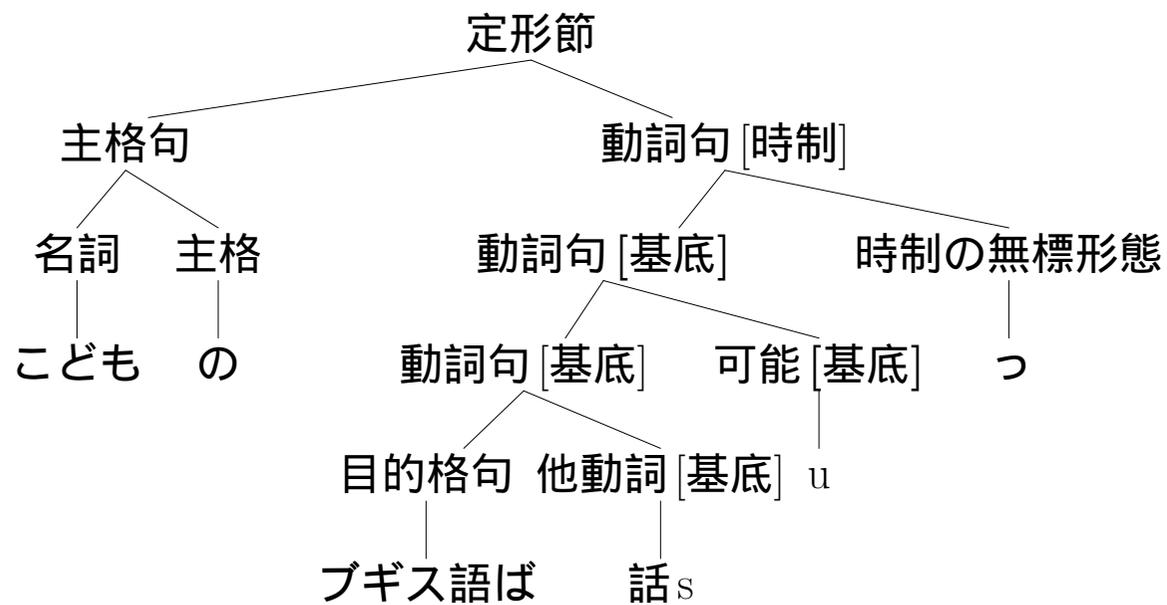


図 4: \*‘こどもの ブギス語ば 話suっ’ の分析

### 3 憶測：佐賀方言に/V[bse]-u-ru/がない背景

#### 3.1 Koga 2009 の強変化動詞と佐賀方言の母音/e/終末語幹動詞の非過去形の分析

Koga 2009 は、/u/ を時制の無標形態 ( Default morpheme of tense: DfltMT ) であり、すでに時制が付いた動詞にさらに時制の無標形態がすぐ後ろから付いても、再び、時制付きの動詞になると分析します ( 18a, b )。 /u/ の意味は、恒等関数で、時制の意味を持つ動詞を得たら、その意味に返します ( 18c )。

- (18) a. DfltMT (the default morpheme of tense)  $\rightarrow$  /u/  
 b.  $[VI-tnsd [VI-tnsd X][DfltMT Y]]$   
 c.  $[VP-tnsd [VP-tnsd X][DfltMT Y]]$   
 d.  $/u/' = \lambda X \lambda e \lambda t [X(e)(t)]$

時制の無標形態は、動詞の基底形にも付くことができる。

/r/ は、時制関連の音韻充填材 (Tense-related phonemic filler) であり、時制の無標形態の前に充填されて、そのまま時制の無標形態と分析します (19a, b)。時制の意味を取って、さらに、そのまま時制の意味に戻します (19c)。

- (19) a. TnsPFllr (the tense-related phonemic filler)  $\rightarrow$  /r/<sup>1</sup>  
 b. [DfltMT [TnsPFllr X][DfltMT Y]]  
 c. /r/' =  $\lambda Y \lambda X \lambda e \lambda t [Y(X)(e)(t)]$

意味的にはなにも貢献しないことを意味します。

この時制の分析は、たとえば、動詞の非過去形として適切ではない \*/kurasu ru/ でも、文法的には (理論的には) 正しいとし、以下のように分析します。

<sup>1</sup>Nasukawa 2005 explains how the default consonant and the default vowel [ru] and [u] occur in the slots of [onset -][nucleus -] and [coda -] in Japanese. The slots are of the super-segmental structure of verbs specified in the lexicon. See footnote ??.

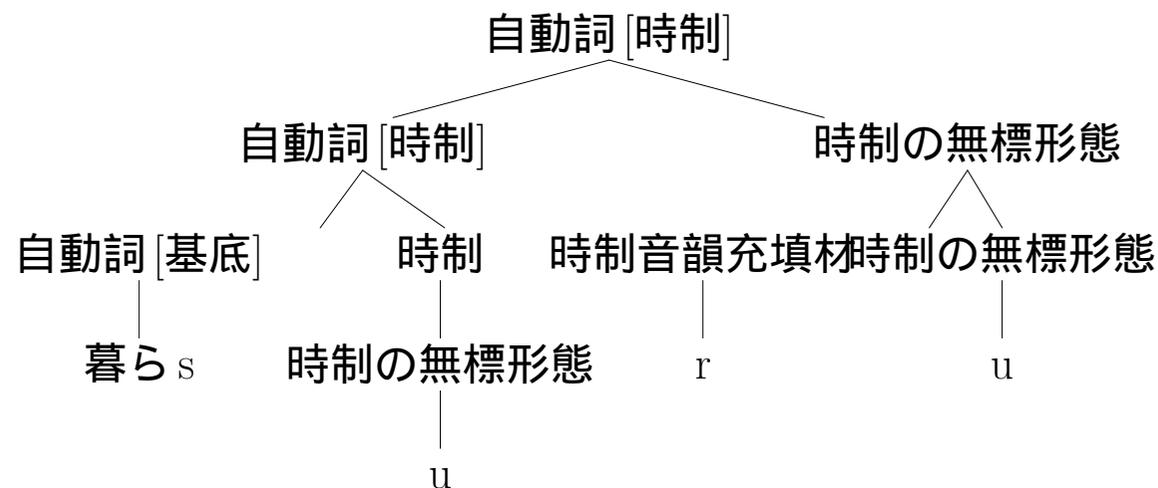


図 5: Koga 2009 により文とされる \*/暮ら s u ru/ (cf. 暮ら s u ‘live [Non-past]’)

Koga 2009 は、この語は、単に必要なのに、時制の無標形態 /ru/ を付けているので、経済制約の違反として、文法的に適切ではないと言います。

既存の考えや国語学では不規則としていた「活用」に統一的な説明を与えます。柳川方言や佐賀西部方言の母音 /e/ 終末語幹動詞の「活用」(例、 /tab u ru/,

/tabe ta/) を、ふたつの基底形(例、/tabe/と/tab/)に帰着させて、説明します。標準語の不規則動詞の活用(/k u ru/「来る」、「来ない」や/s u ru/「する」、「しない」)を、それぞれ、/ko/と/k/の基底形に帰着させて、/si/と/s/に帰着させて、説明します。さらに、古典語の/k u/ /s u/なども説明できます。山口方言の「死ぬる」や「往ぬる」も説明できます。

### 3.2 接辞の差異化：妨害を受けた同音異義の接辞

質問 1 1 ) Koga 2009 を使えば、「話すっ」も語としては適切でないが文法的には正しいとなります。そうすると、たとえば、佐賀西部方言では「こどものブギス語ば話すっ」は文法的には問題はなくなります。たとえば、この文はどのように分析されますか。また、その分析の結果から何がわかりますか。

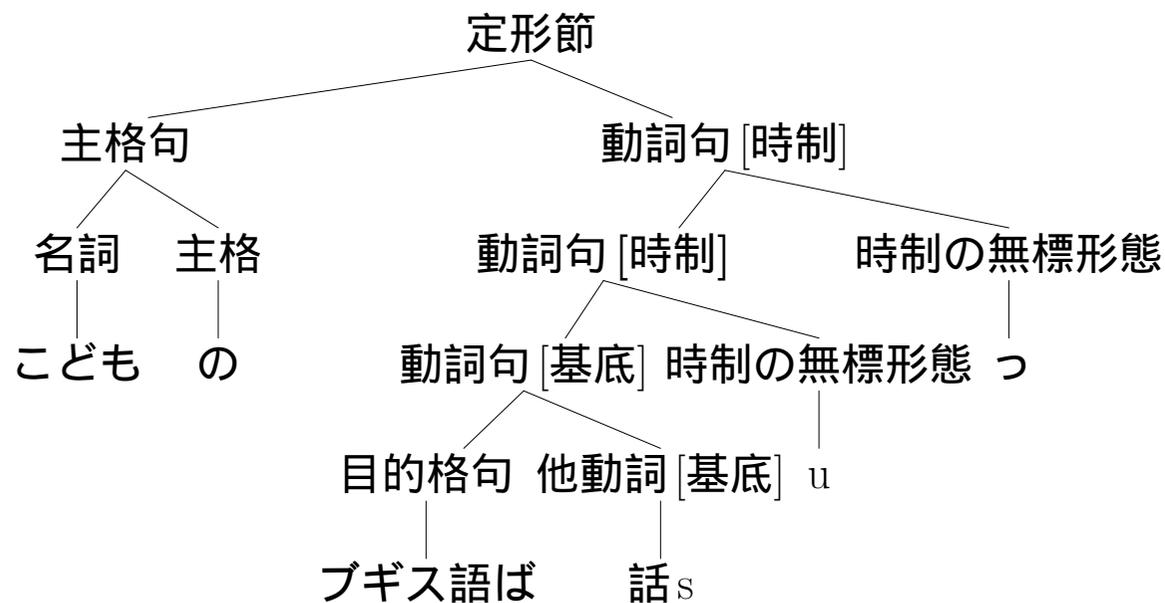


図 6: \*‘こどもの ブギス語ば 話suっ’ の分析

これは、/u/が図(4)では可能形態[基底形]で、図6では時制の無標形態となっているところが違うだけで、構造はまったく同じである。つまり、もし佐

賀西部方言で標準語の/(rar)e/の佐賀西部方言の対応形が使われたら、たとえば、「話<sub>S-U-RU</sub>」、「話せた」が使われるだろう。そして、子音終末語幹動詞全部について、非過去形なのか、可能形なのか混乱をきたしたであろう。これを、佐賀西部方言は避けたと考えられる。

これは、形態論における「妨害」で、「妨害」が本当に必要な規則となるかは、言語学者の間でも議論されていることであるが、本研究からわかったことは、接辞間の妨害は必要であるということである。なぜなら、同音異義の接辞があれば、その数は、この例のように、ひとつの形態種の間ですべて混乱が生じるからであろう。また、同音異義の接辞の妨害が行われるには、言語使用において実際に混乱がしょうじなければならないようで、可能形と非過去形の違いが言語使用の文脈だけからわかるのはむずかしく、このことがこの妨害を最終的に生じさせたもうひとつの理由であろう。

「ら」抜き言葉：

受け身形： yom-are, tabe-rare, ko-rare

可能形： yom-e, tabe-(ra)re, ko-(ra)re

ところが、実際は、言語使用においては、あまり進行していない。おそらく、受け身形と可能形の違いは、言語使用の文脈だけからわかることが多く、実際には混乱が生じない。このおかげで、この妨害が起こらないのであろう。

## 参照

Koga, Hiroki. (2009). *Surface constraints on multiple default morphemes of tense*. Manuscript read In the 9th International Conference on Tense, Aspect and Modality, September, 2009, Université Paris-Diderot.